

【ねがいましては】

令和4年11月8日

KYOWA SCHOOL

第379号

「放っておく」

ある日の新聞に、東京大学名誉教授の仲邑賢龍（なかむらけんりゅう）さんの記事がありました。東大先端科学技術研究センター教授だそうで、専門は人間支援工学。何やら難しい肩書きです。

読み進めてみると、出てくる出てくる、私が普段感じていることと同じことが……。仲間がいた！っと、失礼な言い方かもしれませんが、今の教育界が染まっている気づかない慢性疾患をことごとく語っていました。

その部分を抜粋します。『不登校が増えているのは、学校があまりにも「一律」なのが問題の根本だと思います。』

これは、仲邑教授が現在取り組んでいるプロジェクトが、学校になじめない子どもたちを集めて「異才」を発掘することだそうで、当然なじめないということは学校へ行っていないということにつながります。

次が、『子どもが成長するにつれ、親は上手に手を離す必要があるのに、つい先回りして手を出しすぎる傾向が強い。決して見捨てずに「放っておく」ことが肝心です。』

つまり私も常々訴えてきたことなのですが、転びそうになるとついつい先回りして、転ぶ前に手を差し出して受け止めてしまうこと。すると転んだ際の痛みを全く味わうことなく元に戻ってしまう。これが毎回繰り返されると、子は自然とある錯覚に陥ってしまいます。「きっといつでも助けてくれるに違いない」です。子は転んだときの痛みを知らずに大人へと成長し、やがて親がそばにいなくなったとき……。というわけです。転ぶことの大切さを子どもの時期に体得することはとても大切なこととなります。もちろん転び方を親はしっかり見つめる必要があります。先ほどの教授のことばに「見捨てずに放っておく」とありました。ここが大切です。初めての自転車の時、初めてのスイミングの時、子はきっと親にそばに居てほしいはずです。しかしそばに居すぎでは乗れるようになりませんし、泳げるようにもなれません。そこで出てくるのが子との「距離」です。親としてはその距離の勉強が必要になります。

次の教授のことばです。『今の学校や社会は、子どもを型にはめて育てることにばかり熱心で、自分たちの側を変えようとしていない。素直に学校へ行っても、知識だけの受動的な学びに、これでいいのかと疑問を感じる子たちもいます。「ちょっと授業が面白くないから、あっちに行ってくる」「今日はカブトムシのプログラムが面白そうだから行ってみる」。不登校がどうかにかかわらず、誰もがクラスを離れて参加でき、在籍校にも認められているもう一つの「君の学校」。そんな場が全国各地にできれば、と夢見ています。』

まさにこれだと思いました。受動的な学びに疑問を感じている子の方が正しく育っているのだと私は思います。毎日成績のことばかりが頭をよぎり、半分心身症のような状態に陥っている子はたくさんいると思います。そんな子が普通の子として存在するような状態が今の子どもたちかもしれません。そのような子ばかりが教室に溢れていれば、自然と多数派の原理で当たり前状態になります。周りの人たちが一斉に歩き出せば、たとえ赤信号でもつい自分も歩き出してしまふ状態です。「そうか、きっといつからかは解らないけれど、赤信号が渡っていい信号になったんだ」と。そんな状態に陥ってしまっている子がたくさんいるのかもしれませんが。

時々私はここに通う子たちに話しかけることがあります。「フツーに考えてみてね」と……。そして極々当たり前なことを話します。例えば「授業中解らないことが出てきた。その時質問している？」「学校から出された漢字の宿題、書いてあればそれで花丸もらえるよね。意味がわからないで書いていても花丸だよ。おかしいって感じたことは？」「テストで戻ってきた答案の中に、マグレでたまたま合ってしまったものがあつたら喜んじゃうでしょ、あれって本当は学んでいないことになるのだけれど、なぜ喜んじゃうのかな？」などなど。

フツーに考えてみれば確かにそうだよねと思わせる内容なのですが、ではその後、彼らは変化したかという……。そうなんです。変な当たり前があたりまえになってしまっているのが現実です。いつでしたか、『学校の先生が「選択問題があつたら、わからないときにはどれか選んでおいてください」と言ってた。』と、話してくれました。

いったい学校の本来の目的は何なのだろう？

ひょっとしたら、仲邑教授がかかえている子どもたちが本来は正常であり、以外の子どもたち、つまり毎日学校へ通っている子たちが本当は異常なのかと思わせられる記事でした。

学びは何をやっても楽しさで溢れています。読むこと然り、書くこと然り、計算すること然り……。

本来の教育は、子どもが生き生きと想いを馳せることのできる環境を大人たちが準備してあげることだと思います。しかし子どもたちは自らの将来を『成績』という魔物に操られ、自由を失い、気力は褪（あ）せ、不安が増し、表情は暗いまま生活しています。

比べない……。子どもたちを比べることから脱却させ、お互いに助け合いながら学びの神髄を感じることのできる場を公の機関は真剣に考えなければならぬと思います。あくまでもテストは「個」の成長のみを確認するものであることを願います。ですからテストには点数はつきません。テストにあるのは、丸だけです。その丸は、もう一度しっかり学び直す必要のある箇所にあります。「君の将来を左右する学び直しの所だよ」の意味です。